



みやぎ

宮崎県JICA派遣専門家連絡会

CONTENTS

帰国専門家中央連絡会に出席して	玉井 理
宮崎県JICA派遣専門家連絡会の皆様へ	山口 三郎
会員の現地報告シリーズ5 田園の香りがする埃レストランのヴィエトナム	山口 良二
帰国専門家中央連絡会の報告	玉井 理

帰国専門家中央連絡会に出席して

宮崎県JICA派遣専門家連絡会

会長 玉井 理

前回の「連絡会と協力隊OB会や地方自治体との連携のあり方」についての討議を受けて、今回の全体テーマは、「地域に根ざした帰国専門家連絡会活動の展開をめざして」でありました。中央連絡会での報告概要は、本会報に掲載しましたので、全体の内容はそちらに譲るとして、討議に参加して、今後の連絡会活動を進める上で必要と感じたことを述べさせていただきます。

まず、連絡会会員をしっかりと把握すること。そのためには、まず、会員の確保が必要です。会員を確保するためには、JICAから、連絡会関係派遣専門家についての的確な情報（専門家名、派遣国、指導科目、配属機関またはプロジェクト、派遣期間、派遣前勤務先、帰国後勤務先、現住所、電話番号など）を適時（少なくとも年度初めに）に提供してもらうことが必要です。これらの情報をもとに、入会を勧める（できれば、全員入会していただければ有り難いのですが）。

会員間に活動への参加の仕方に温度差がある（会合への参加者が限られている、活動的な会員が固定されている、など）と言われている点ですが、会員それぞれの本来の業務の状況が異なるので、無理もないことと思います。しかし、連絡会活動への関心を高める上で、会員間の連携を密にすること。その

ために、日常的に情報を届けること（速報的なニュースレター、FAXやメールの利用）。現地活動報告会の開催方法を改善する（派遣専門家が帰国される都度、間をおかずに開催し、報告の時間と質疑の時間を十分に持つ、など）。などに取り組み、より一層連絡会員間の連携を密にしよう努めたい。

「地域に根ざした帰国専門家連絡会活動の展開」のために、まず、会員についてのデータベースを整理し、連絡会が地域社会の国際協力、国際交流に貢献しやすい基盤を整備する。このような、足元固めと平行して関連諸団体との連携を強化し、各団体との協力の下に地域での活動を展開していく。この際、マスコミの協力を得て、連絡会活動を地域社会に広報する。これらの実施には、この度、配置された国際協力推進員の協力を得ていく。

平成14年度は、以上のような取り組み努力をしたと思っています。なお、現在、幹事諸氏は、それぞれ公務多忙の中で、連絡会活動に対し、精一杯の取り組みをして下さっています。この事務局体制で、いかにすれば幹事諸氏の負担を増さずに、上述の課題に取り組んでいけるかを工夫していきたいと思っています。会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

宮崎県JICA派遣専門家連絡会の皆様へ

国際協力事業団九州国際センター

所長 山口 三郎

昨年11月、メキシコ事務所よりここ九州の地に着任致しました。

会報「JICAエキスパートみやざき」第5号の刊行に当たり、こうして専門家連絡会の皆様にメッセージの掲載をさせて頂くことに対し心から感謝申し上げる次第です。

平成8年度に装いも新たに発足した九州国際センターは研修員の受け入れのみならず地方発の国際協力のあり方等について広く論議を展開するとともに、情報交換の場を提供してきています。

こうした機会を通して九州管内全域において小学生から一般までの各層に対するきめ細かな広報を実施し、関係機関や市民の関心を高め、市民参加型国際協力事業への理解・促進、NGO・自治体或いは大学等との連携により国内外において事業の形成・支援を行っています。

特に、開発教育のネットワーク作りには協力隊OB会、専門家連絡会にとどまらず、中学・高校生のエッセイコンテストや中高校教師海外派遣、またODA実体験セミナーほかこうした機会をとらえて将来の国際協力を担う、サポートする人材の養成に努めていることも既承のとおりであります。

さてJICAでは常に顔が見える、現場主義の重要性を標榜しています。海外の現場とは一味違って国内に軸足をおいた地方発の現場主義。

これまで東京本部と在外事務所しか勤務経験のない私にとって当管内で出会った人達との新鮮でそして真剣かつ真摯な会話と行動力に本当に驚かされています。先日、開催された開発教育九州・沖縄セミナー IN 宮崎での「～地域から広げよう 地球市民の輪～」の大成功、熱気溢れる県民の意気には感動いたしました。

それぞれの専門家がそれぞれの地域（国）でそれぞれの分野での貴重なノウハウを有しておられます。また、それぞれの国がそれぞれの課題に対応する援助ツリーを模索しています。

専門家が培ってこられたそのノウハウを如何にして課題克服のために宮崎発の或いは九州発の国別・地域別アプローチに反映させることが出来るのでしょうか。時期を得て論議が出来れば幸いです。

連絡会の益々の発展をお祈りいたしますとともに、共にあゆむべくよろしくお願い申し上げます。



会員の現地報告シリーズ5

田園の香りがする埃レストランのヴィエトナム

宮崎大学農学部 山口良二

日本では“ベトナム”と習慣で書くが“ヴィエトナム”と現地では表記している。「先生こんにちはヴィエトナムのプロジェクトに病理学のセットアップをお願いしたいんですけど、頼んだら、ほんとに来ていただけますか？」という旨のメールをいただいたのは、出発もさかのぼるところ半年以上も前の2000年7月である。タイでお世話になった専門家の要田（かなめだ）さんから我田引水的に解釈すればタイでの私の働きをみてくれたようで声をかけてくれた。

私はこれまでアフリカのザンビア、南米のアルゼンチン、東南アジアのタイJICA短期専門家として派遣された。これまでの派遣された経験からセットアップというのは大げさではないかなと思ひ、何日かした後によく話を聞いてみると、ヴィエトナムでは、はっきり言って病理学の概念もない国であるような話しぶりであった。早くいえば、動物が病気で死んでも、食べてしまえばそれでいいという経済的国情である。この点に関していえば、日本もBSEが万分の1の確率で人間に変異型ヤコブ病として感染する疑いがあるため少しでも肉骨粉を与えた牛が焼却処分されるというのも皮肉なものである。

そもそも病理学というのは病気を診断するためにナイフと顕微鏡さえあれば何とかなる学問である。しかしその顕微鏡をみるために標本を作製しなければならぬがその際日本では多くの場合自動包埋装置を使用する。それが無い場合、実際に日本の大学でもやっているところもあるが、その気になれば何本か瓶を使って決められた時間に次の瓶に移していく手回し（手動）法があって最後にパラフィンに埋め込んで、パラフィンごと薄く切って標本ができあがる。薄く切る装置はマイクロームという。耳を疑ったことにヴィエトナムにはそれもないらしい。包埋装置もない。ということではあったが、私が派遣される場所はヴィエトナムの中心になるハノイのNIVR（国立獣医学研究所）という研究所なのでそれほどひどくはあるまいと思ひ少し期待感をよせながら話を進めていった。しかし、いっこうに、何か装置がそろっているという話も聞かないし、病理の研究をやっている話も聞かない。ホルマリンやトルエンも何とか中国から入るかもしれないという話を

聞いてから現実的に厳しい状況だと実感した。

その時点でカウンターパートの責任者ニンさんは、つくばの家畜衛生研究所（現：動物衛生研究所）に研修に来ているらしくスタッフの状況もわからなかった。彼が帰国する前に宮崎に派遣したい旨の打診があったので快諾した。一人では宮崎に来られないので通訳兼付き添いの齊藤さんと一緒に宮崎にきて2-3日間滞在した。病理の標本を少し見せて彼に勉強してもらおうと思って1時間くらい話をしていたが、彼が一生宮崎に来ることはないと言った話のストーリーから感じたので、勉強はヴィエトナムでやればいいと思ひ、青島、日南海岸や堀切峠を案内した。彼はそのことに感激し、けっして大げさではなく海をみながら海の向こうにつながっているヴィエトナムに思い寄せて涙を浮かべていた。何度もありがとうとってくれて、その夜は一緒に宮崎の繁華街橋通りで当教室の立山教授とともに夕食をした。いたくこのことにも感激し私と立山先生に「兄弟・ブラザー」という呼び方をしていた。立山先生にヴィエトナムの焼酎を送ると何度も話していた。余談であるが彼はその約束を守って私がヴィエトナムから帰国する時に立山先生の分と学部長の分とおみやげとしてボトルをもたせた。

ヴィエトナムへいくにはビザが必要である。出発までには今回は充分時間がありいつも最終的に時間がなくなるので早めに手続きを済ませてくださいますとJICAにはお願いしてあったが、何の手違いか、また毎度のように派遣がぎりぎりとなり、グリーンパスポートが間に合わない事態になって、大学の研究協力課の村中さんから早くしてくださいとの催促があった。しかし運よくというべきか文部省から文部科学省への省庁再編と重なり、今回は特別に一般旅券でいけるとあって、村中さんもそれなら充分間に合いますと太鼓判を捺してくれた。

1月28日 日曜日宮崎から成田へ行き、雪が降りつもった成田で一泊。ホテルからは成田空港の滑走路だけが闇に浮き上がって線を描き積もった雪も相まって日本での最後は宮崎では見ることができない夜の雪景色であった。1月29日早朝、成田を出発して5時間10分後、香港で約1時間の乗り継ぎ、ハノ

イには2時間後の現地時間午後3時55分に着いた。ハノイの空港の建物は思ったより小さく税関審査所も簡易なものだった。帰国後田中真紀子外務大臣がハノイを訪れて空港が映像で見せられたときテレビでこれこれと感激しながらニュースをみていたが、案外テレビでは立派な空港に見えるものである。

荷物を探していることやイントネーションが変わっている日本語で「山口先生ですか？」尋ねられたので振り返ると「越田です」と紹介され、海外に永く住んでいると日本語も変わるものだと思った。後日、日本に帰化したベトナム生まれの有能な専門家であることがわかった。越田さんがいなければこのプロジェクトも厳しかったかもしれないほどベトナム語が普通に話せる越田さんにはプロジェクトのみなさんが助けられていた。ちなみに私の滞在中に越田さんはベトナム語1級に合格した。そのお祝いを有名レストランでしていたところブーチン大統領が来るというので大騒ぎになり私はそのためにデジカメをタクシーでホテルに取りに行った。SPがうろうろしていたが、彼らは1時間経過して引き潮のように去って行って、場所を変えたかキャンセルになったようだ。

ベトナムにはビアホイというビアガーデンのような食事と一緒にできる場所がある。ビールもアルコール度数が2.5-3%と低い。その夜は久しぶりに再会した要田さんとウイルス専門家の吉田さん、越田さんがビアホイで歓待してくれた。ここでは、様々なものが注文されるが全く中身がわからなかった。ベトナムでは最初に落花生が必ずといっていいほど通して出てきた。カラ入れはなく足下に落とすのが慣わしく「落花生」ならぬ「落下生」で、帰国までどこへ行ってもそれは普通に見かける光景だった。

30日 NIVRに初出勤した。朝、車で送ってくれるがベトナムでは車は右側通行で左折車が多いの

に規則性がなく車の切れ目がない。そのため、左折するときは進行中の車の流れに飛び込んでお互いがお互いの気持ちを理解するようにゆっくりさけて左折し終わる。交差点でなくても研究所の門を出るときも交通量の多いところを横断して左折する。みるとコツがあり、まず左折するときひだりからくるまがくるそれが、まるでマジックで助手席に乗っていると、正面から車やバイクが来るので心臓が止まりそうである。なれるのに数日かかったとはいえ、最後までこれにはまいった。研究所へ行くときにコンピュータ関係を確認したが手元にはなく、早速セミナーのためのプロジェクターとベトナム語仕様のコンピュータを用意してもらったが、ベトナム語仕様のコンピュータは全くまともに日本語を受け付けず、日本語仕様で作ったファイルも受け付けず。自前のパソコンを新規購入して持参したがプロジェクターへのアダプターが足りず、後日要田さんに日本からベトナム来る人を捜してもらって買って来てもらうことになった。それまでは、持参データの入っているハードディスクから吉田さんのコンピュータに移してお借りしてセミナーをすることになった。日本でプロジェクトと話をしている途中でお願いされたので、日本では日常で手一杯だったため準備もできなかった。ベトナムではコンピュータと液晶プロジェクターを使ってセミナーしようと考えて、打ち合わせながら、ベトナムには専門書はほとんどないと考えて下さいということだったのでかなりの本を送った。実際に専門書らしき物は現地では入手できなかったのそのうち半分近くはスタッフやNIVRに寄贈してきた。その中にはアメリカ留学中に購入しベトナム現地にもないと聞いていたPathology of Domestic Animalsも含まれていた。送付した本の荷解きをおこなった。



カウンターパートとなるスタッフを紹介してもらった。スペイン語訛りでキューバ留学の長かったクワンさんとビンさんである。クワンさんは引退前で毎日新聞を読んでいてなんと暗愚なと感じてはいたが、解剖をさせたり、組織の話や通訳をさせると能力を発揮した。引退前のせいか行動力に難があるが、キューバで少しは基礎的な病理の勉強してきたらしいと気づいて評価が変わった。娘さんの結婚式に招待され出席した。ビンさんははじめに標本を作製していたので、この人に将来はかかっているかもしれないと感じたので後日なぜかやめてしまったと聞いたときはNIVRの人材難を日本で憂えた。要田さんも嘆いていた。所長に挨拶した。所長はこのプロジェクトに理解ある人だと聞いた。

昼食はそれほど期待はしてなかったが、屋台のような露天商ばかりで、それを埃レストランと呼んでいた。すでに料理してあるものを何人かで食事について、みんなでつつきあって食べた。結構それがおいしかった。野菜系が多く、その他魚のフライや豚肉、牛肉が並べられ、ご飯は細長いインディカ米で、日本のジャボニカ米よりおなかにたくさんはいった。日によってはフォーといううどんのような麺を食べることもあり結構これが病みつきになっておいしかった。

その夜、副所長ニエンさんとニンさんと歓迎会を催してくれた。副所長ニエンさんは機嫌良く酔っぱらい同じ言葉を繰り返す、ニンさんはそれにいろいろ助言していた。ブランデーをビールで割って飲んでおり、これが上等な飲み物のようだった。歌手が生演奏で民族の歌を歌っていた。ニンさんにもう疲れて帰りたいと何回も促したが、「関係ないもっと飲め」という調子でほとんど参ってしまいそうであったが、これが 베트남 流の歓迎だと思い喜んで甘受した。酒を飲むのも仕事という昔懐かしき我がふるさとのような光景であった。

研究室の指導や打ち合わせ、セミナー準備などにおわれていたが、3月3日休日になると一人でホアンキエム湖周囲を歩いたり、旧市街を古い Vietnam を想像しながら歩いた。そこには漢字がふんだんにある寺があった。Vietnam を知るには博物館が最もいいと思い、Vietnam 歴史博物館にいった。古い品や陶器など多数展示してあって歴史的に重要と感じる部分も多数あったが、未だ、整理されていないようでさらに説明は Vietnam 語であった。後日越田さんに一緒に来て解説してもらおう約束

をした。中国との関係が歴史上重要であるようで、ここでも漢字がいろんなところで使われていて、越の国は中国文化の影響を受けていることがよくわかった。今ではローマ字、アルファベットが使われているが、Vietnam 語の読みは漢字に当てられるらしく、フランス統治時代に無理矢理アルファベットに変えられたらしい。それ故、Vietnam 語の発生には漢字が関係していることがわかった。博物館で目を引いたのは越国が中国を大敗に追い込んでいる絵で、日本での元寇や諸葛亮孔明が Vietnam を攻めたときのことを思い出した。翌4日、日曜日にも昼から美術博物館や文廟(孔子)にいった。漢字ややきものなど、そこで日本と共通する文化が多いことを感じさせられた。

5日と6日研究室のセットアップをしたいが、カウンターパートの責任者のニンさんが来ていない。それゆえ、セミナー準備をおこなった。7日ハンドアウト作成を夕刻まで作成した。喉が痛くて風邪のようだ。これが長引いて24日頃まで続いた。

8日水も用意され一部屋に受講生が一杯になり、ついにセミナーが始まった。参加者は Vietnam の地方からも多数集った。これは要田さんの折角のセミナーを多くのヒトに拝聴していただきたいという配慮でもあり、ベトナムのヒトに病理を理解していただきたいという教育的なプロジェクトの配慮でもあった。スライドやカラープリンターの少ない世界だから私が持参してきたスライド用画像がみんなの目を引いた。私が英語で話をして Vietnam 語に訳される通訳付きで、カウンターパートのクワンさんが私が話したことを通訳した。半日のセミナー終了後、翌日のハンドアウトの作成に取りかかった。



10日病理関係のスタッフと寄生虫のスタッフが休日を返上して私と後日着任した河本さんを Vietnam の街に案内してくれた。この河本さんは短期専



門家としての立場が私と同じではあったが、発展途上国への派遣されたのは初めてでその点では不安な気持ちと好奇心と使命感一杯で思う通り行かないことに対する憤りがひしひしと私に伝わるものがあった。若いときには東南アジアの人々に対する自分の思いや自分たちのことではなく人ごとのように感じる動きに対して私もこれまでによく感じたものだが、河本さんも似たような愚痴をこぼし私もよく聞いてあげた。私も愚痴をこぼしていたのかもしれないが、都合の悪いことは忘れた。しかし毎日、元気いっぱい澁刺として、河本さんの若さある行動力には感心した。タイ湖（西湖）にも行き祭りなのか露天商が並んでそこを歩いて奥に目的地の仏教・ヒンズー教の多層の塔を意味するバゴダがあった。おもしろかったのがそこにある商店街で見かけた懐かしきタニシで、たくさんおいてあったので妙に気を引いてそれを使った料理の一つでタニシ麺なるものを食べた。私の子供の頃日本にも田圃でかなり頻繁に見かけて食べたこともあった。味は日本で食したときは癖があったがそれよりさっぱりしてサザエのような食感であった。にぎやかなハノイの旧市街を散歩した。市場へもいって見たが、小間物をたくさん売っており、安いのが当然のごとく品質が気になった。その後シクロに試しに乗ってみないかと誘われ、ベトナム人と一緒になければ乗れないと思って乗ってはみたがりヤカーに乗っているような気分であった。風邪で調子が悪く、ベトナムの冬は日本で想像したより宮崎の冬のように寒く、防寒用上着を購入した。ちなみに河本さんは日本からブランド物のベトナムのものより10倍もする値段の防寒着をもって着ていた。よく見ると裏にベトナム製と書いてあったのを初めて気づいたらしく啞然として、私はクスと笑ってしまった。彼らに食事までごちそうになり昔懐かしき日本の心の交流を感じ感謝した。

12日にはカウンターパートに以前から指示していた先週ようやく動物室を改造して準備できた簡易解剖室で、デモ用の豚を病理解剖した。ひね子豚だったが、この国ではよく考えれば驚くことでもないかもしれないけれども、このような豚も通常は食されるため購入費がいる。午後はハノイ農業大学の学部長兼学長にアポをとってあったので病理のスタッフのクワン、ニン、ビンさんとともに面会に伺った。ハノイ農業大学はNo1大学という別名があり、場所は中心から車で2-3時間くらいはかかったような気がする。その際、私のセミナーを受講している病理のラン先生に病理を案内していただいた。ベトナムではイヌ肉を食べるらしいが、帰りに誘われるがままにいつものように地酒付きで、病理のスタッフと地元のヒトしかいかなような食堂を訪れた。犬を食べる習慣が残っているのは中国と韓国だと思っていたがベトナムにもあった。元気が出ると言うことで地方の人には人気があったが、一般にいつも食べているところを見かけたわけではなく、通常食しているようでもなかった。

13日からようやくいくつか病理解剖がはいる、帰国まで、豚丹毒、豚コレラ、クロストリジウム性出血性腸炎等を診断した。このように解剖で診断と考察していくことはあまりないらしく参加者は驚いていたようであった。

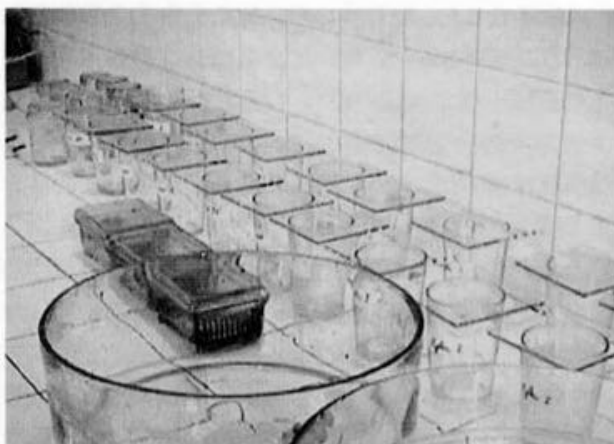
14日ハイフォンに、厚生省に關係する検査機関があるというので副所長ニエンとクワン、ニンさんの案内で河本さんとともに案内された。ハイフォンは私が幼きベトナム戦争時代に北爆の対象となってハノイとハイフォンのセットで当時の日本ニュースに出ていたことを思い出す。見学した施設は畜産品を日本へ輸出するための施設ですごくきれいであった。トリヒナの検査や種々の細菌検査がなされ、日本へも骨粉などを送っているようであった。その後昼食、ワイン2本、ブランデー2本が振る舞われベトナム流の歓迎をうけた。その後外国人用の立派なカジノに案内されたが興味がなかった。次に、ニンの同級生の警察官とレストラン経営しているところへ招待された。40度前後の焼酎甲に熊の胆汁を直前に入れて杯程度の大きさのコップに注がれ、reindeer, wild boreなどの珍しい肉も振る舞われた。疲れてコップにつがれたアルコールを断るのも大変で、それを飲み干すのが礼儀で飲むと皆大喜びであった。帰りは夜中になった。木曜日と金曜日はハンドアウトを作成して、配ってセミナーを実施した。

17日の休日やきもので有名なバチャンがニンさんの家の近くなので訪問した。有田焼を思わせるような雰囲気の街であったが有田の街ほど大きくはない。やきものほとんどは手がきで、有田焼に比べると厚く重かった。ベトナムのやきものには歴史があり、日本でも利休より少し以前には茶の道具として高価だったようである。帰りにニンさんの家に招待され、ごちそうになった。そのときセリがヴィエトナム語でゾークンと言い“草”を意味すると聞いた。

18日の休日午前中ゆっくりして、軍事博物館にいき戦争時代の地下壕の模型や本物の戦車、銃などが展示されていた。映画「地獄の黙示録」の音楽ワグナーのワルキューレの騎公子?の曲が頭に浮かんで、ヴィエトナム戦争にまつわる話を思い出しながら観覧した。

19日にはヴィエトナムの農場か牧場の現場も知る必要があると思い、To LienのCau Dien Daily Cattle Farmというところへいった。リーダーの吉原さんは寄生虫の専門家でヒメモノアラガイをぬかるんだ水たまりで多数見つけ、収穫に喜んでいた。こんな単なるぬかるみにもいるのだと私も勉強になった。

20日豚の浮腫病、豚コレラを2頭を解剖した。その写真整理をして翌日21日のセミナーに使った。午



後から病理解剖用トレイやホルマリン瓶、手術器具を探しに行つて、何とか病理解剖できる最低限の道具と手術器具が手に入った。

22日セミナー後、ホテル日航ハノイでJICA専門家の四木会があった。その後懇親会があり珍しい人に出会った。私が東大医科研に修士の大学院生としていたとき同じ大学院生博士課程、癌ウイルスに所属していた医者の小原さんがバクマイ病院プロジェクトのチームリーダーで来ており20数年ぶりの再会であった。こちらもそうだが小原さんもびっくりしていた。この日は河本さんと吉原さんが牛の採血から帰ってきてヴィエトナム流の歓迎により焼酎の強い洗礼を受けダウンした。

23日セミナー終了後、英語ツアーガイドのロン(龍)と河本さんとともに夜行寝台列車にのって山岳民族が生活しているSAPAへ出かけた。ヴィエトナムは想像以上の多民族国家でハノイに居ては感じられない。それを一番理解するには山岳民族に出会うことである。SAPAは昔フランス人が避暑地として開拓したところらしいが古来の山岳民族の文化が残っている。SAPAにはモン族とザオ族がいて彼らの生活している村にトレッキングしながらお邪魔するのである。モン族は藍染めの民族服を着て肌がインディゴで青くなっていた。ザオ族の女性は頭に赤い座布団のようなものを載せていたがその下は坊主のようであった。豚、鶏、馬、水牛、山羊などの動物が馬を除いて放し飼いにされていた。24日朝、ラオカイに到着するとロシア製の旧式ジープがまわってSAPAへいった。これが何とも言えずシンプルで面白みがある。現在の日本のパジェロを大きくしたような感じではあるが、横のドアは簡易な鉄板で座椅子も簡単な作り、エンジン音はいかにも原始的な音である。特にワイパーは簡易で、手で拭いた方が早いようなものもちろん金属ではあるが、割り箸のような感じがした。しばらくすると棚田がみられ、民族衣装を着たモン族に出会った。テレビで観光客が来ると観光のために出てくるアマゾンの部族を思い出したが、観光客のためだけではないような気がした。ザオ族はホテルに着いたらお店をフロアに広げていた。チェックインしてからわずかな入場料を払ってトレッキングに出かけた。ロンなしでは来られなかった所だなと感じた。雨も降り出し、夜は案内人ロンが紹介したヴィエトナム料理を食べにいった。ヘビ酒やビール、ハリネズミなどがメニューに挙げられており注文して食べた。思ったよりおいしく感



じた。茶碗をくれという意味で「カップカップ」といったのだが焼きめしがきてしまって後悔した。夜は雷雨となったので翌日のトレッキングが心配であったのだが、朝には雨も上がり逆にそのおかげで、棚田に水が一杯となりその風景は昨日とうって変わって美しく昨夜の雨はラッキーであった。トレッキングには昼食付きとあったがツアーガイドのロンが市場でランチの材料として購入したものを村の家の籠を借りて作る野戦料理で、メインは焼きそばであった。帰りはジープが迎えにきて寝台列車で戻った。夕食の場所が駅周辺になく交渉して列車の社員食堂でお粥を食べた。決して経験できない休日を過ごし、翌朝、ハノイに到着し朝食をとっていつものように職場で仕事をした。

2日最後のセミナー終了後、秘書のカム（琴）さんが作成して所長と吉原リーダーとともに私のサインもある修了証書を参加者全員に授与した。その後打ち上げランチパーティーをピアホイでニンさんを中心に開催してくれた。ほんとはいやになっていたがビールのボトムアップを数杯要求されて主賓であ



るために雰囲気壊さないためにも断れなかった。その上、発酵した甘酒のような日本酒に類似している地酒の壺がでてきて、上にミネラルウォーターを



充分満たしながら、数本のストローで何人かで飲むのがまた壺酒を飲むときの習慣らしい。



3日休日、河本さんと吉原さんは寄生虫の部屋でピクニックに誘われ、越田さんは私が同行を願望していた歴史博物館に連れて行ってくれた。2度目で今度はヴィエトナムの解説を越田さんが説明してくれたので博物館の展示物を理解できた。

5日病理の部屋で今後について話し、6日ハノイの西方に位置するハーティ省の養豚場見学に行った。肥育から種雄まで見学し、ベトナム北部地域のほとんどの雄はこの研究所から出荷されるのことであった。昼は村の祭りにぶつかり、ビールと焼酎を半強制的に飲まされた。初対面なのに飲まないにつきあえないとのことであった。帰ってから報告書を作成した。

7日は小原さんにバクマイ病院を見せてもらった。フランスからの援助によってたてられ古く重みがあった病院は約100年たった。今回の病院のプロジェクトは大きく、5億円か10億円の日本の無償援助でできた新しい病院は壮観であった。この夜NIVRのプロジェクトで送別会をしてくれ、8日河本さんの指導で2頭の摘脾手術した。そのうち1頭は弱って術後数時間で死亡したので原因を探求以前に心構えとして牛を食うことや皮も売ること優先して、原因

究明を目的として指導して解剖している河本さんに対してカウンターパートが聞く耳を持たず剥皮に気を遣って、解剖終了前には四肢などの肉がなくなってしまうようだ。国情とはいえ寂しく感じた。また、河本さんは憤っていた。夜は病理の送別会でニンが設定してくれた。また、乾杯乾杯が始まった。例の2.5-3%アルコール度数のビールジョッキを10杯くらい乾杯してのみ干しを要求された。最後の数日は報告書と荷造りにおわれた。その報告書の一部を以下に紹介してプロジェクトの皆様には感謝しながら文を閉じる。



その他の所感（全体を通して：ベトナムという国の特質と将来の発展）としてこの国は豊かである。食べ物、心、行動力、基本的な物質。もちろん、文明国に比べたら便利なものは少ないかもしれないが、他国と比較しなければかつて日本が高度成長期に感じた幸せを私は感じて、そのことで今ベトナムの人々は幸せかもしれない。ただ衛生面、獣医としての働き、最高のものを求める目すなわち満足するレベルが高くないことに不満を感じる。日本が経過してきた道とは異なり、これまでの建国過程と関係があるかもしれない。ベトナムはかつての日本とどこか似ているようである。昼酒も、あうんの呼吸も、田植えも、農耕牛も、農耕水牛も、米も、

農家も、自転車も、よく働く人たちも何か遠い日本の田舎を感じさせるが、何かが違う気がする。似ていて非なり。発展に必要なのは指導者の気持ちと求める完成度と、皆に与える知識の分け与えのように感じた。国民性であるが故にこれ以上のコメントもないが、よく働き、正直で、親切で優しいという点において将来を期待したい。あうんの呼吸で運転する交通ルールがベトナムの状況と今の国民性の



すべてを物語っている。やろうという気持ちがなければ何事もそれですんでしまう可能性がある。病理学においては、未知数と記しておきたいが、教えれば吸収する国民性であるように思う。

獣医学全般にもいえることであるが、病理学の問題は獣医学における動物の病気の研究にも関連がある。産業としての畜産に病気を解決する意欲が乏しく、病気になった牛に対する獣医や飼い主の行う後処理で病理学が期待されていない。獣医に対する周囲の意識が問題かもしれない。病理は周りが育てようという意識がなければ成長は少ない。その意識を高めるためには病理学のセミナーを実施し、重要性を周りに認識させることも大事であると思われる。病理解剖のために材料は入手（搬入）されないし、相談もされない。そのことが今後の病理学の発展の障害になるだろう。

帰国専門家中央連絡会の報告

玉井 理

平成13年度の帰国専門家中央連絡会は、12月7日に青年海外協力隊広尾訓練センター（東京都渋谷区）で開催されました。各県の帰国専門家連絡会が集まり協議する中央連絡会は、従来、毎年開かれていましたが、平成11年度の中央連絡会の折りに、隔年開催が決まり、今回は平成13年開催となったものです。

今回の中央連絡会は「地域に根ざした帰国専門家連絡会活動の展開をめざして」という全体テーマのもとで開催されました。

協議にはいるに先立ち、理事の挨拶、JICAの地域連携事業の説明、青年海外協力隊OB会の活動紹介、国際協力推進員の活動紹介、地域連絡会の活動紹介、ODAをめぐる動きの説明がありました。

国際協力事業団理事挨拶（諏訪 龍氏）

ODAは従来、国対国として実施されてきたが、今後はこれに加えて市民参加型の協力が重要であり、幅広い市民層の中でも「国際協力の担い手」として海外の現地で活躍した経験を持つ専門家OBによって結成された帰国専門家連絡会には、ODAに対する市民の理解・参加の促進に関する働きかけに大きな期待を寄せている。

JICAの地域連携事業

（国内事業部長 今津 武氏）

国内事業部設立の経緯、国内事業部を中心とする各地の国内機関とNGOや地方自治体との連携による事業展開状況、地域に根ざした技術・経験をJICA事業に活用することを目指した「100万人サポーター計画」を説明した。更に、今後は、途上国の知恵を借り、「共に考え共に学ぶ」姿勢の大切さを述べた。

青年海外協力隊OB会の活動

（青年海外協力協会近畿支部長 香月龍太郎氏）

青年海外協力隊OB会の活動として、自治体受け入れ海外研修員との交流（リクレーション活動、日本語教育、生活相談など）、自治体国際交流・協力イベントへの参加（交流事業へのリーダー派遣、運営委員、ブース出展など）、国際理解教育・開発教育への講師派遣、自主的な国際理解促進活動の実施（帰国報告会、国別勉強会の実施、体験広場の設営

など）などを実施している。

派遣専門家連絡会との連携として、学校教育、社会教育の教育プログラムの共同開発、適地技術と環境問題に関するセミナー、シンポジウム、イベントなどの共同開催、総会、例会などへの相互出席、テーマ別情報交換の場づくりを行っている。

国際協力推進員の活動紹介

（青森県国際協力推進員 松館 文子氏）

新しい制度により全県に国際交流推進員が配置されることになる（現在、26名の国際協力推進員が各県に配置されている）。その職務は、各県内における国際交流関連事業の連絡調整、情報収集や広報などを行うものである。配置先の青森県における帰国専門家との連携実績について報告をした。

地域連絡会の活動紹介

(1) 北海道JICA帰国専門家連絡会

（代表幹事 金川 弘司氏）

「国際協力は広く市民の参加を得て展開されるべき」という方針の下に、帰国報告会には、専門家夫人の参加を得て、夫人からの体験談も提供され、広い情報提供の場となった。また、北海道NGOネットワーク協議会へも加入をしていることなどが報告された。

(2) 富山県JICA派遣専門家OB会

（事務局長 白山 肇氏）

11月10日に富山県JICA派遣専門家OB会主催で実施した「国際協力フォーラム in TOYAMA」が、石川県、福井県両県のJICA派遣専門家OB会の協力の下に、外山、石川、福井3県の青年海外協力隊OB会、青年海外協力隊を育てる会、支援する会の共催で行われた経緯、得られた成果、今後の課題などが報告された。

ODAをめぐる動き

（外務省経済協力局技術協力課長 渡邊 正人氏）

予算抑制の影響により、前年度に比べ、約10%減が予想され、技術協力の形態も量より質への転換が求められている。「草の根技術協力」として、民間の人材活用、NGOや地方自治体、大学等との連携

強化、シニア海外ボランティア制度の推進が重要となる。また、2年後に控えた、JICAの独立行政法人化に伴う外交政策とJICA事業との関係のあり方も課題となると説明した。

(協 議)

全体テーマは「地域に根ざした帰国専門家連絡会活動の展開をめざして」ですが、先ず4つの分科会に分かれ、「テーマ1：地球ネットワーク（自治体、NGO、協力隊OB会、推進員等）の形成について」または「テーマ2：専門家経験の地域社会への還元」について討議と意見交換が行われました。出された意見をテーマ別にまとめると次の通りになります。

「テーマ1」

- (1) 会員名簿の管理が困難である。会員の住所変更に伴う事務手続きが煩雑。
- (2) 活動的な会員が固定されている。勉強会などによる会員の活性化が必要。
- (3) 連絡会の存在意義を示す活動を積極的に行うことが必要。地域に根ざした活動もその一つ。
- (4) 過重負担にならない活動を計画することが活動の継続に必要。
- (5) 会報による一方的な情報提供は時代に沿わない。
- (6) メーリングリストやホームページの活用を検討すべき。
- (7) 協力隊や他の交流団体とのネットワークづくりに国際協力推進員の役割が重要。
- (8) 途上国で活動し、生活し、そして学んだ、という協力隊と専門家との共通点をベースに共同活動テーマを探ることが必要。

「テーマ2」

- (1) 会員の中でも活動への参加の仕方に温度差がある。組織内部の強化が必要。
- (2) JICAからの定期的な情報提供（派遣国、専門分野等）による、名簿管理の徹底と情報のデータベース化が必要。
- (3) JICAからの情報提供の時期としては、1）派遣前、2）派遣中、3）帰国時が望ましい。
- (4) 他団体との連携を図る上で、データベース公開を検討してよい。
- (5) 連絡会の活動の広報手段としてマスコミの活用も有効。
- (6) イベントなどの行事に専門家夫人の参加は大きな力となる。

分科会終了後、全体会議において各分科会からの報告に基づいて、討議が行われました。

様々な意見が出された中で、今後の連絡会活動を考える上で、留意したいものとして、次の事項がありました。

- (1) 会員の把握のために、連絡会関係専門家の派遣について、JICAから正確な情報（専門家名、派遣国、指導科目、配属機関またはプロジェクト、派遣期間、派遣前勤務先、帰国後勤務先、現住所、電話番号など）を提供して欲しい。
- (2) メーリングリストやホームページなどITシステムの活用を検討する。
- (3) 関係諸団体との連携、ネットワーク化などにより地域との連携を深めていく必要がある。
- (4) これらの実行には、国際協力推進員の協力が大切である。

(配付資料、刊行物など)

「平成13年度中央連絡会資料 帰国専門家連絡会12年度活動報告集」(2001, 12)

「北海道JICA帰国専門家連絡会会報“想遠”第5号」(2001, 9)

「JICA帰国専門家宮城県連絡会会報 第8号」(2001, 3)

「海外技術協力のきずな 第2号(JICA帰国専門家連絡会)」(2001, 5)

「SUPPORT 6号(うつくしま未来博特集号) JICA帰国専門家福島県連絡会」(2002, 1)

「海外技術協力NIIGATA No.6(新潟県JICA帰国専門家連絡会)」(2001, 3)

「長野県JICA派遣専門家連絡会会報 News Letter No.3」(2001, 3)

「JICA派遣専門家東海OB会機関誌 NEWS LETTER No.9」(2001, 6)

「なごやJICA会報 Vol.5」(2002, 2)

「EXPERT KAGAWA No.8(JICA専門家香川連絡会)」(2002, 2)

「NEWSLETTER No.7(福岡県JICA派遣専門家連絡会会報)」(2001, 3)

「NEWSLETTER No.8(福岡県JICA派遣専門家連絡会会報)」(2001, 9)

「JICA EXPERTSくまもと No.8(熊本県JICA派遣専門家連絡会)」(2002, 1)

「大分県JICA派遣専門家連絡会会報 第5号」(2002, 1)

「九州ネット 新春号(国際協力事業団九州国際センター)」(2002, 1)

「平成12年度業務報告書(国際協力事業団九州国際センター)」(2001, 7)

「JICAフロンティア」国際協力事業団月刊誌 2001年発行分

「クロスロード」青年海外協力隊月刊誌 2001年発行分

「SOUTH WIND」(財)宮崎県国際交流協会季刊誌 2001年発行分

「外交」(社)外交知識普及会隔月発行 2001年発行分

ご覧になりたい方は玉井までご連絡下さい。

宮崎県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

平成12年2月17日

1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び宮崎県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、持てる知識、エネルギー等を結集して、前記の動向の有効な発展に資すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結成する。

2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係わる事業を行う。

- (1) 政府開発援助（ODA）の進展動向に関する調査研究および提言
- (2) JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等
- (3) 宮崎県と海外諸国（特に発展途上国）との国際交流活動の促進、充実に資する諸活動
- (4) 会員相互の情報交換、交流、親睦に関すること

3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、本会に入会届を提出するものとする。

4. 会長及び幹事

- (1) 会の運営を円滑に行うため、当会に会長1名及び世話役として幹事2名を置く。
- (2) 会長は会務を総括し、会を代表する。
- (3) 幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議、決定を行い、会員の協力を得て、第2項に定める会務の執行に当たる。
- (4) 会長および幹事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。
- (5) 本会に顧問として、JICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。
- (6) 本会に会計役を定め、所定の会計処理を幹事が兼務する。

5. その他

- (1) 本会の事務局は、幹事の所属機関または住所におく。
- (2) この申し合わせ事項を改変し、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、会員の過半数の同意（集会又は郵送による）を得て施行する。

附 則

本申し合わせ事項は、平成6年3月22日から施行する。

一部改正（平成9年2月4日）により、第2(2)及び第5(1)の九州支部を九州国際センターに並びに第4(2)の九州支部長を九州国際センター所長に改正する。

一部改正（平成12年2月17日）により、第4(1)を幹事2名に改正する。並びに第4(5)に本会に顧問としてJICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。また、第4(6)に会計役を定め、所定の会計処理を行う。また、その他(1)本会の事務局の変更を追加する。

上記は、改正日から施行する。

編集後記

宮崎県JICA派遣専門家連絡会会報・第5号をお届けいたします。

担当の不手際により、本号も発行が遅くなってしまいました。深くお詫び申し上げます。会員の現地報告シリーズの様な、興味深くかつ会員の活動を後押ししてくれる内容を増やしていけたらと思っております。会員の皆様には今後とも、ご協力よろしくお願い申し上げます。 (幹事記)